

# やまとの名品 天理図書館



くまのほんじ  
熊野の本地

2冊

室町時代末期写

縦32.0cm 横25.5cm

奈良・平安時代より、日本の神々は民衆を救済する為、仏菩薩が仮の姿として顕れたと考える本地垂迹思想が盛んであった。これを基に、諸所の神々の本地仏が定められ、神仏や寺社の縁起、本地譚が作られた。室町時代の短編物語であるお伽草子にも本地譚があり、苦難を受けた主人公が、神仏の加護を得て助かり、自らも神仏に転生するとして、信仰の功德を説く。

お伽草子『熊野の本地』は天竺摩訶陀国の五衰殿の女御をめぐる物語から、熊野三所権現の由来を語る。摩訶陀国の善財王には千人の后がいたが、子どもは一人もなかった。ある時、后の一人である五衰殿の女御が王の寵愛をうけ、子を授かる。他后の後達は女御を妬み、武士に女御の殺害を命じる。女御は山奥で無残な最期を迎えたが、死の直前に誕生した王子は、母の祈念により、仏の加護をうけ、母の亡骸から乳を吸い、山の神や獣に育まれ、成長する。三年後、麓の寺の聖に見いだされた王子は寺で養育され、七歳の時、王



鹿や猿と戯れる王子

との対面を果たす。全てを知った王は、后達の心の醜さを嫌い、王子・聖、秘法にて蘇った女御と共に飛車に乗り、国を出て、紀伊国音無川の辺に熊野三所権現として顕れた。

『熊野の本地』は中世の熊野信仰の流行により、広く読まれ、伝存する諸本も多い。本書は大型本で金銀泥を交えた極彩色の挿絵を持つ初期奈良絵本。極札には、室町時代の武将で、歌人・書家としても秀でた十市遠忠の筆とある。その真偽は未詳であるが、書写年代は室町末期を下らないとされている。豊臣秀頼の遺愛の書として伝わる。

(天理図書館 西田裕美)

天理図書館のお知らせ Tel: 0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>

◆平日(午前9時~午後5時半) 土・日・祝(午前9時~午後4時半)

○10月の休館日:18日・26日・30日

(本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください)